

リレー エッセイ

テーマを投げる職員もテーマを受け取る職員も誰から何のテーマが来るのか編集委員からのオーダーがあって初めて知る本コーナー。職員が知らないあの職員の内側をのぞけると、職員間でひそかな人気です。

「学生時代の思い出」(吉田職員からのリレーテーマ)

りとるらいふ・きらの金子と申します。去年の10月からきらで勤めております。今回職員リレーエッセイのテーマが学生時代の思い出なのでがんばって昔の事を思い出してみました。

時期的なこともあり夏休みのことが真っ先に頭に浮かびました。夏休みになると毎日部活に行ったり海にいきました。1人で行ったり、みんなでったり。毎日海に行き泳いだり、何もせずにぼーっとしたり、たまには釣りをしてみたり。夕方になるとかき氷屋に行き好きなかき氷を食べて家に帰る。これが毎日の日課でした。今はそこまで海に行く事も少なくなりましたが、いろんな場所にいろんな思い出があります。

あの日にはもう戻れないけどりあえす毎日がんばっていこうと思います。

きら生活支援員 金子将志

お知らせ

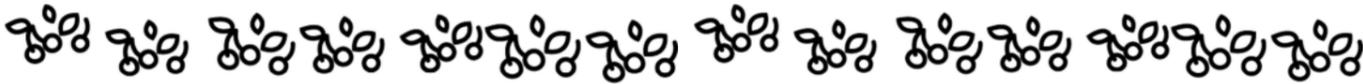
以下の通り7月26日付で職員の人事異動がありましたのでご連絡致します。

退職

笠原 洋紀

～今までお世話になりました。

ありがとうございました。～



「夏といえば」(浅野職員からのリレーテーマ)

「夏といえば」思い出す♪♪……なんて歌があったかと思いますが。色々と思いつきますが、私にとって「夏といえば」山かな。そこには当然冷えたビール付きですが……。今年から8月11日が山の日で祭日です。きっと、メジャーな山は混雑するでしょうね。

登山を始めたのは10年位前で、50代になってからです。

若いときは、たまに、友人に誘われて行きましたが、そんなに興味がなかったわけではありません。年齢を重ねそれなりの立場でストレスも溜まり、その解消のために登山始めたのがきっかけです。登っているときはただ、苦しくやっと山頂に立ち下界を見下ろした時に疲れと一緒にストレスも吹っ飛んだ気がし、また、途中リタイアせずに登頂した達成感が忘れられず今に至ってます。昨年は、長野県の高妻山、乙妻山、今は規制がかかり登れない焼山に登りました。(その他にもいろいろ)今年も、春先に周辺の山を三座登りました。

夏場は少し標高が高い山をと考えております。



事務長代理 相羽正幸

「私のこだわり」(小林泉職員からのリレーテーマ)

「ちょっとお茶していきなさい」

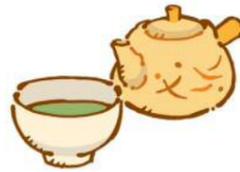
人と人との気軽に繋がる言葉。

小学生の頃よく祖母と一緒に近所の家に行き温かいお茶と漬物を出してもら

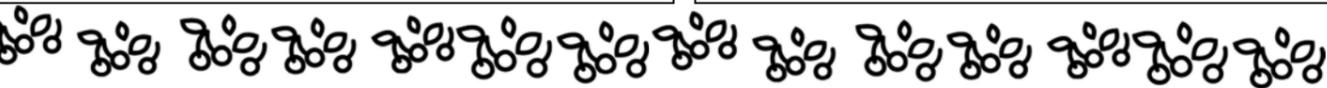
いました。大人の会話はよくわかりませんが、出してもらったお茶に「ホッ」と気持ちが落ち着いたことを覚えています。

そんな経験を経てこの頃から、私は「日本茶」が好きになったと思います。朝の日課はお湯を沸かして急須でお茶を入れることです。お茶について詳しいわけではないのですが、急須で入れたお茶は「色・香り・味」すべてが魅力的に感じます。その日の気分によって選んでいますが、緑茶が多いです。緑茶には、さまざまな効能があると言われています。風邪予防や食中毒予防、さらに癒しの効果まであるそうです。ららんの夏休みもお茶パワーで元気に頑張りたいと思います!!

ららん支援員 矢澤優佳



次回テーマは金子職員から「秋の楽しみ」、相羽事務長代理より「あなたの元気の源は」、矢澤職員より「私の好きなこと・趣味」です。次号もお楽しみに!!



発行者：社会福祉法人みんなでききる 障害福祉事業部りとるらいふ

通信に関するお問い合わせ先：事業部代表 TEL025-542-0170 (担当：金子)

りとるらいふ通信

(社福) みんなでききる
障害福祉事業部りとるらいふ
発行日：2016年8月

青い空、白い雲。暑い毎日が続いていますが、皆様お元気でしょうか？プールや屋外での活動が増えているためか、日に日に職員が日焼けで黒くなってきているような気がします(´_`)/
体調を整え、ご利用者の皆様と残りの夏を楽しく過ごしたいと思います！



「支援の向上」への取り組み ～内外研修をご報告します～



今年度、私たち障害福祉事業部では「安全・安心なサービス体制の構築」「人材育成」の二つの目標を掲げ、様々なマニュアルの作成や教育システムの構築に取り組んでいます。その一環として行っている様々な内部研修の実施や外部研修の派遣に関して一部ですが、ご紹介致します！

☆障害福祉基礎及び障害特性理解研修☆

障害福祉業務の経験の有無に限らず、りとるらいふ入職後1～2か月以内に必ず受講させる研修です。この研修ではまず、障害福祉支援業務にあたり必要な視点等基礎的な理解を講義や演習を通して学びます。その後、主として発達障害を中心に基礎的知識や行動特性、「構造化」等の支援の手立てに関する講義を全般的に学びます。この講義の中では例えば「異国語で講師から話しかけられたらどのように感じ、どういった行動をとるか(相手からのメッセージの理解の困難さ)」「説明なく複雑な工程を要する課題を出されたらどのように感じ、どういった行動をとるか(時間整理統合の困難さ)」「ビニール手袋をはめて折り紙を折る体験(手先の不器用さを体験)」等キャップハンディを演習を通じて体験し、生活の中での困難さについて考えたりグループで議論をするといった内容もあります。行動援護従事者養成研修や強度行動障害支援者養成研修で講師を務めるスタッフが講師となり、これらの研修の凝縮版として展開しています。



☆ABA研修☆

昨年度に引き続き、部内研修として上越教育大学の加藤哲文先生を講師としてお招きし「ABA (Applied Behavior Analysis) 研修」を行っています。「ABA」とは日本語では「応用行動分析」と言い、あるひとつの行動を見る際に、その前後の環境や相互作用を捉えて分析する考え方のことです。そのように分析することで、その行動が生じる理由を推測し、行動そのものをよりよい行動に結びつけていけるようにするために、様々な環境や相互作用を再設定していく手がかりにしていきます。この研修では応用行動分析に関する講義のみではなく、本研修にご協力を頂いている利用者の方の日々の支援の中で生じた行動や前後の記録を蓄積し分析を行なったデータを基にし加藤先生よりアドバイスをいただきながらケーススタディ的に学びを深めています。



実際の支援現場の中でデータを蓄積し、分析をかけていくという作業は簡単なことではありませんが、こういった積み重ねや学びの場を設けていくことで「支援の手がかり」を作り「安全・安心なサービスの提供」に繋げていくことが出来るようにしていきたいと考えています。

タイ・カオティーン村のこと ～幸せのカタチ～

社会福祉法人みんなできの 副理事長 片桐公彦

が非課税であろうという生活がここでの当たり前のような風景です。学校に行けば子どもたちの靴下は穴だらけ、医者は当然おらず、体の調子が悪くなったら1時間かけて病院に行きます。看護師らしき女性は「日本の資格でいうと准看護師くらい」ということですが、保健所の所長をしています。多くの公的機関やセクターにおけるクオリティーはソリッドさに欠けています。

ですが、子どもたちや女性はよく笑い、男たちは物静かながら風格に溢れ、彼らの宗教的な敬虔さに裏付けされた礼儀正しさや思慮深さを見ていると、とても幸せな気持ちになれました。厳肅なところもありつつも底抜けに明るく、優雅で気品ある営みを感じました。これは何だという疑問を感じ、その答えはまだ分かりません。

福祉制度も全くといってよいほど整備されていません。日本の社会保障制度に「ギリの国は羨ましいなあ」と言われました。日本では家族は介護から解放され、女性もそれなりに働けるようになりました。働きに出るので保育園が整備されました。さらに国は「1億総活躍」を掲げて全ての人々が能力を発揮できるような社会の実現に向けて動きだしました。「同一労働同一賃金」のスローガンの下、格差を是正しようという動きは喜ばしいことだと思います。経済的に停滞しつつも知恵を出し、超少子高齢化を乗り越え、私たちの国はさらなる「幸せ」の階段を上ろうとしています。

でも、それでも、この国が進むべき方向が本当に幸せに向かっているとは素直に言えない自分があります。それはカオティーン村に行き、彼らの謙虚さや礼儀正しさ、営みの緩やかさや時間の流れの穏やかさに身を置いてみたときに、自分の暮らしや営みの尺度でいう「幸せ」とは別のカタチがあったからです。それは貧しいとか電気が通っていないとか、道路が舗装されていないとか、食事が質素であるとか、こうした社会的なインフラを真ん中においた「幸福論」だけで人々の豊かさは語れないのではないかとこの頃思っていました。

昨年「社会保障のスーパーモデル」といわれているスウェーデンを訪れました。圧倒されるくらいに充実した福祉制度、個人が家を建てる時に金利だけ返していけばいい金融システム（リーマンショックのように個人資産を金融商品化する仕組みです）のおかげで経済的には大きな成功を収めています。夫婦間の離婚での慰謝料は国が一旦立て替えをし、再婚した場合には慰謝料の支払い義務が免除されます。障害福祉制度ではかの有名な「パーソナルアシスタンス制度」が充実しています。その根底に流れているのは「厄介なことは基本的に政府が引き受けるんでさっさと経済活動に動い込んでください」という徹底した合理的な思想であり、我々には想像つかないほどの個人主義です。この思想や制度的な国民へのコミットは全土に広がっているといえます。

制度的な意見を求められる時、多くの人々は「スウェーデンでは」「デンマークでは」「アメリカでは」と経済的に豊かな国の事例を取り上げてはその制度の充実のための声を上げていきます。ですがそうした意見の多くは空を切り、実現はしていきません。日本という国は緩やかに欧米・北欧スタイルへの羨望から現実的なアジア諸国のドメスティックな関係を基盤としたスタイルへと舵を切らなければならない時期にきているかもしれません。それは単純な我が国の財政的な事情だけではなく、我々の民族にフィットした生き方への模索の方向感として、という意味です。

きっと、私はこれからもこの村に行くことになるように思います。「俺たちは本当に幸せなのか？幸せのカタチとは何か？」の答えを探しに。

7月26日～8月2日までタイに行ってきました。目的は「カオティーン村」という首都バンコクから350km程離れた地域に今後5年間かけて高齢者のデイケアセンターを建設しようというプロジェクトが立ち上がり、一緒に支援をしないか？という誘いがあったためです。

このプロジェクトのきっかけは古く、約30年前まで物語は遡ります。私が尊敬してやまない社会福祉法人グロ―理事長（旧滋賀県社会福祉事業団理事長）の北岡賢剛さんが若かりし頃、カオティーン村を訪れていました。10年以上に渡って子どもたちへの支援をしたり、村人との交流をしたりといった活動を続けていました。しかし北岡さん自身も大変に忙しくなり、なかなかカオティーン村に行くことが出来なくなっていました。それから数年経過した後、たまたま出張でタイに行った時に、当時カオティーン村で交流していた少女大人になってバンコクの近くの土地で雑貨屋を営んでいることを知り、再会を果たします。その後、カオティーン村に再び北岡さんは訪れ、村長らと会話を交わす中で、以前は子どもたちへの支援が中心であったが近年は高齢化の問題が顕在化しつつあり、デイケアセンターの建設が必要であるがその資金の捻出が難しい事を知った北岡さんが全国の関係者に呼びかけ（私もその関係者の1人だったわけです）、今後5年間かけて交流を続けながら、カオティーン村にデイケアセンターを建設しようというプロジェクトが立ち上がった、というわけです。

タイに行くのが初めてだった私は食事や言葉（カオティーン村ではほとんど英語は通じません。タイ語です）、風習といったものに馴染めるだろうかと思いきや正直、不安になりました。しかもカオティーン村滞在中はホームステイ（ホテルがないのです）、しかもしかもお風呂は雨水を貯めた水で水浴びし、トイレも水洗ではなく衛生状況はあまり良くないし…等々、ただでさえ海外が苦手な自分なのに一体どうなるんだろうと気が重く、不安になりながら参加しました。

実際に尋ねたカオティーン村ですが、私はすっかりこの村やそこに暮らす人々の営みが好きになってしまいました。住んでもいいとすら思いました。食事は美味しいし、トイレもお風呂もそれほど気になりませんでした。人々は皆優しく、本当に心の底から私達を気遣ってくれました。朝、布団や毛布を畳もうとすると「ギリ（僕はそう呼ばれていました）、そんなことなくていい」と言って（多分）、とにかく親切心に溢れていました。それは我々が単純にデイケアセンターを建設したり、経済的な援助をするといった理由を超えた何かがあるように思えました。

カオティーン村を離れた日、人はなぜ、こんな風に優しくいられるのだろうかと思いつき、帰りのバスの中でよぎったその思いが、帰国した今も自分の心のほんの少し先で揺れています。

日本という国は経済的にも豊かで周りを海に囲まれた5つの島からなる小さな土地の国です。戦後に急速に発展を遂げ、GDPにおいては長らくアメリカに次ぐセカンドポジションを維持していました。日本人の所得が上がり、食料に不足はなく、医療や福祉、年金といった社会保障のインフラが整備され、娯楽や情報に溢れています。平和を愛し、勤勉で、災害時でも供給品の配布にきちんと並び姿への海外からの賞賛は我々の誇りでもあります。きっと日本という国で暮らす人々は個人差や環境の差や感じ方はあるにせよそれなりの幸福に包まれているようにも思います。

でも思います。本当に私たちはこれを本当に「幸せ」と取り扱って良いのかどうか。

今回訪れたカオティーン村はそれなりの整備はされているものの、お風呂やトイレの水は雨水を貯めて使い、食事はうっかり気を抜くとお腹をこわします。主要な産業は農業で所得水準は決して高いものではありません。日本であれば市町村民税

新任職員向け研修に参加して

私は6月1日、2日に新任職員研修、

3日に接客研修に参加させていただきました。

今回初めて社外での研修に

参加させていただきました、とても緊張し

最初はなかなか自分の意見を言うこと

が出来ませんでした。しかしグループワークや演習を通して徐々に発言

できるようになりました。特に印象に残っているのが、接客研修での

一般の接客業との違いについての講義です。「相手(お客様や利用者の方)

を大事にする」ということは同じであるが、「そのサービスを喜んで

受けているのか」という点で違いがあると学びました。利用者の方は

様々な状況や思いを抱えて利用されているので、今回学んだ「接客」

や利用者の方のことを思う気持ちをより強く、丁寧を持たなければ

いけないと感じました。この接客についての講義やグループワーク

で感じたコミュニケーションなど、この研修で学んだことを日々

の中で意識し、きちんと身につけたいと思います。

きら生活支援員 桂菜穂

社会福祉施設中堅職員研修へ参加して

新潟県社会福祉協議会主催の研修へ参加させていただきました。

2日間の日程で、福祉施設における勤務経験2年以上の中堅職員が

対象の研修です。当日は100名以上の参加者が来られており、多

くの福祉施設の方と顔を合わせる良い機会となりました。

今回の研修を受けるまで、恥ずかしながら中堅職員というポジション

を意識したこともなかったため、自分の未熟さを痛感しながら勉強

させていただくことができました。

特に中堅職員は職場の潤滑油としての役割があること、また職場の

キーパーソンとなりつつ周囲に良い影響を与えられる存在になること、

という2点を学び、自分の現在の仕事のやり方がどうだったかを

改めて考えさせられました。

また、グループごとで議論する機会も多かったのですが、皆さん福祉

社の現場で様々な想いを抱えて利用者様やご家族の皆様と向き合っ

ていることを知ることができました。

とても貴重な経験ができましたので、学んだことを生かせるように

取り組んでいきたいと思えます。きら主任生活支援員 笹川義智

タイ視察研修を終えて～心の豊かさとは～

最初の3日間は、タイのナコンサワン県パイサリ郡カオティーン村というところにホームステイしました。カオティーン村は、首都バンコクから車で4時間ほど離れた小さな村です。その村に高齢者のデイケアセンターを作るため、全国から沢山の福祉関係者が集まり、村の人々との交流をしてきました。その時の様子をご紹介します。

《カオティーン村のこと》 村の暮らしのこと 豊かな自然の風景が広がり、舗装のされていない土の道が延々と続いています。ニワトリが放し飼いされていたり、犬がお昼寝していたり、牛の群れが人の誘導によって道路をのんびり歩いていた…というなんともどかな風景が広がっています。

《村の人々のこと》 タイでは、挨拶のときに「いただきます」の時のように両手を合わせて挨拶します。村の人すべてが、挨拶のときは、両手を合わせて、にこやかに挨拶をします。とにかく挨拶のときは、笑顔をつれない村の人々に私は、とても感動しました。そして初めて会う私にもタイダンスの衣装を着させてくれたり、食事のおもてなしをしてくださったりと、非常に優しく接していただきました。

《子どもたちのこと》 子どもたちは元気いっぱいでした。かくれんぼやハンカチ落としなど、日本でも馴染みの深い遊びを大笑いしながら楽しみました。言語は通じなくても、子どもたちは楽しそうにコミュニケーションを取り、無邪気な笑顔を見せてくれました。短時間で溶け込ませてくれた子どもたちの笑顔はこの村の宝物だと思います。

《村を訪問して》 決して、設備が完璧に整っているわけでもなく、便利なものがすぐ近くにあるわけでもないこの村で、村の人たちや子どもたちは、常に笑顔で私達を歓迎してくださいました。初めて会う人に対してここまで優しくできるのは何故なのか、すごく考えさせられる3日間でした。物の豊かさで満たされるのではなく、心の豊かさがあるからみんな笑顔で人にやさしくできるのかもしれない。

数日間日本を離れ、異国の地を覗かせていただきましたが、小さな村の幸せに触れることができ、素敵な体験をさせていただきました。

ぶあん主任 藤田千夏

